

降誕日 ヨハネ1章1―14節

【直訳】

- 1 初めに あった 言が、
そして 言は あった 神のもとに、
そして 神で あった 言は。
- 2 この方は あった 初めに 神のもとに。
- 3 すべてが 彼を通して 成った、
そして 彼を離れて 成らなかった なにひとつ。
成ったもの
- 4 彼の中に いのち あった、
そして いのちは あった 人々の光で。
- 5 そして 光は 闇の中に 輝いている、
そして 闇は それを つかまなかった。
- 6 成った 人が、
遣わされた者が 神から
彼の名は ヨハネ。
- 7 この人は 来た 証しのために
ようにと 彼が証しする 光について、
ようにと すべての人が 信じる 彼を通して。
- 8 なかった その人は 光で、
そうではなく ようにと 彼が証しする 光について。
- 9 あった まことの光が、
ところの 照らす すべての人を、
来て 世の中へ。
- 10 世の中に 彼はあつた、
そして 世は 彼を通して 成った
そして 世は 彼を 認めなかった。
- 11 自分のもの中へ 彼は来た、
そして 自分のは 彼を 受け入れなかった。
- 12 だが彼を受け取った人々に、
彼は与えた 彼らに 神の子となるための権威を、
信じる者たちに 彼の名を、
- 13 彼らは 血からではない
肉の想いからでもない 人の想いからでもない
そうではなく 神から 生まれた。

14 そして 言が 肉と なった
そして 彼は宿った 私たちの中に、
そして私たちは観た 彼の栄光を、
父からの独り子としての栄光を 恵みと真理に満ちた。

〔新共同訳〕

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。
6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によつてではなく、人の欲によつてもなく、神によつて生まれたのである。14 言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。

①構成

Ⓐ ヨハネ福音書の構成は、序（1章）しるしの書（2―12章）栄光の書（13―20章）エピローグ（21章）で成り立っている。序は、プロローグ（1―18節）とキリストについての証し（19―51節）に分けられる。このプロローグは、古い賛歌をもとに作られており、6―8節と15節はオリジナルの賛歌ではなく、福音書記者ヨハネが加えた文章だと見られている。

Ⓑ 1―5節
1 節に使われた名詞を語順どおりに追うと、「言↓神↓神↓言」となる。しかも、1―2節はキアスムスの形を取っている。

初めに あった 言が
言は あった 神のもとに
神で あった 言は。
この方は あった 初めに 神のもとに。

このような荘厳な言い回しを用いることによって、言と神の密接な関係が強調される。

Ⓒ 6―8節
この段落では視点が地上に移り、洗礼者ヨハネの姿が描かれる。ヨハネ福音書では、ヨハネは「洗礼者」と呼ばれていない。ここでは「証し」と「証しする」が合計三回繰り返されている。ヨハネは光そのものではなく、光を「証しする」ために来た。

Ⓓ 9―13節
この段落では「世」が四回繰り返されている。ここでは言と世との関わりがテーマとなっている。

言にとつて、世は「自分のもの」であるが、しかし世は言を認めず、受け入れなかった。しかし、言を「受け取った人々」は「神から生まれた」者であり、新たな創造にあずかった者である。

④ 14節

肉となった言は「私たちの中に宿り」、私たちは言の栄光を観る。その栄光は、「父からの独り子」としての栄光」であり、「恵みと真理」に満ちている。言は神が「恵みと真理」の方であることを現している。

② 初めに言があった（1—5節）

③ この段落は永遠の「言」について述べる。ここには創世記1章1—4節を思い起こさせる表現が含まれている。「初めに」は創世記の冒頭句であり、かつ創世記を示す書名として使われる言葉である。「初めに」「光」という表現の背景には創世記の創造の記事があるが、いわば宇宙的な広がりの中で、この「言」の力強い働きが描き出される。

④ 1—2節は、動詞「あった」を四回繰り返すことによつて、この「言」の存在を強調する。この「言」は「初めに」「神のもとにあった」のであり、時間を超えた永遠の存在であると同時に、神と密接な交わりの内にある。「言は神」であり、「言」は神と同じ本質を持っている。

⑤ しかし、この「言」は、世界との関わりを欠いた抽象的な概念ではない。なぜなら「すべてが彼を通して成った」と言われている。この「言」には、万物を生じさせる無限の躍動する力が秘められている。さらにそれは、単なる力である以上に「いのち」である。だからこの「言」は、人間と真に関わりとうとする神の意思を表すと言つてよい。人間が虚無や絶望や罪といった「闇」に脅かされているときでも、人間を生かそうとする神の意思は働き、その闇を吹き払う。この世は、神が支え、生かす世界である。

⑥ 箴言8章22—31節には、神がこの世を創造する以前に、神によつて創造された「わたし」が登場する。箴言での「わたし」は文脈から見て、知恵を指すのは明らかである。箴言が述べる知恵のように、「言」も万物に先駆けて神のもとにあり、神の創造に何らかの形で参与するものである。

⑦ 動詞「成った」が三回も繰り返される3節では、神がこの「言」によつて創造を行ったことを述べ、4—5節では、「言」のうちに「命」があり、その「命」は人間を照らす「光」であり、この光は闇である世に輝いているが、世はそれをとらえなかった、と述べている。ここまでは、万物の創造における「言」の役割を中心主題としている。

⑧ 言（ロゴス）

⑨ 「言葉」を表す名詞にはロゴスのほかにも、グロツッサとレーマがある。グロツッサは「舌」が原義であり、それぞれの民族に固有の「言語」を意味する（黙五9など）。レーマは出来事となる言葉であり、出来事のうちに響いている言葉を表す（ルカ一37など）。これに対して、ロゴスは物事や思考に秩序を与え、他人との意思疎通の道具となる言葉、また文章・手紙・本など言葉によつて表現されたものを表す。

⑩ ヨハネ1章1—14節では、ロゴスは1節で三回、14節で一回用いられているだけである。新共同訳では「言」が頻繁に繰り返されているが、原文の代名詞をそのように訳したか、あるいは意味を明確にするために補足したものである。

⑪ ヨハネ福音書の序文でのロゴスは、最初に神のもとにあつて、しかも神であり（1節）、すべて（世）がそれによつて成り（3・10節）、そのうちに「いのち」がある（4節）。ロゴスは

「世の中へ来て」（9節）、「世の中にあつた」（10節）、しかも「自分のものの中へ来た」（11節）し、「肉となり、わたしたちの中に宿った」（14節）。14（17・18）節から明らかのように、このロゴスはイエスである。ヨハネは肉となったロゴスであるイエスのうちに見た神の栄光への信仰を言い表す。1ヨハネ1章1節でも、イエスは「命のロゴス」の名で呼ばれている。

③証しする者（6―8節）

⑥ 6―8節は、洗礼者ヨハネの役割を述べるために福音書記者ヨハネが書き入れた部分である。ここから舞台は、歴史の中へと移る。ここに登場するヨハネは、神から遣わされて歴史の中でこの「光」を証しする。ヨハネによる証言は15節に述べられる。15節冒頭では「ヨハネは証しする 彼について」というように、過去形ではなく現在形で書かれる。それはヨハネの証しが時代を超えた真理を指し示しているからである。

④まことの光（9―13節）

⑦ ① 「まことの光」は世に来て、すべての人を照らす。「言」によって造られた「世」は、「言」に応答する力があるにも関わらず、言を「認めず」、「受け入れずに」、十字架によって拒絶した。
② しかし「信じる者」には「神の子」となる力が与えられる。信じる者は人間の血や欲によらず、「神から」生まれる。「神の子」の誕生はいわば第二の創造であり、神のみがそれを成し遂げる。

⑤言の受肉（14節）

⑧ ① 受肉の出来事に焦点が当てられる。1節で描かれた永遠の「言」が、今や時間の中に現れた。この方は、地上的であり時間的な存在である「肉」に完全になった。「宿る」（スケーノオー）は、「テントを張る」の意味であり、旧約聖書では神の臨在の場である会見の幕屋に神が「臨在すること」を表した。
② 肉となった「言」、つまりイエスは神が地上に臨在する新たな場である。その「栄光」を目撃する「私たち」とは、時代を越えた信じる者の群れである。「言」が肉となったので、私たちは、神の声を文字としてではなく、肉声として聞くことができる。それは思いがけないときに、命ある生きた言葉として私たちのうちに宿り、恵みと真理を私たちにもたらす。

⑥独り子によって恵みと真理を見る

⑨ ① 福音書記者ヨハネが、この福音書を天地創造の場面から始めたのは、神の救済の意思が創造の初めから今に至るまで変わらないことを示すためである。その神の救済の意思を告げる永遠の「言」が、時間の中に、この地上に現れた。だからこの方において、人は神が恵みと真理の方であり、人間を救う方であることを知る。地上に降って来た「言」は、やがて十字架において神の恵みと真理を告げる。

⑩ ① 「父からの独り子」は、18節では「独り子である神、父の懐にいる方」と呼ばれる。神との親密さを持つ独り子によって「恵みと真理は成った（現れた）」。「父の懐にいる方が地上に来ることによって、人間は初めて本当の「恵み」と「真理」とを知った。こうして、見ることでできない神が、この地上に現される。独り子の受肉によって、まことの神がどのような方であるかを知る道が開かれたのである。